## 〔B 年〕復活節第 7 主日(2023 年 5 月 21 日)

### 【旧約聖書日課】エゼキエル書　43章1～7節

1それから、彼はわたしを東の方に向いている
門に導いた。2見よ、イスラエルの神の栄光が、
東の方から到来しつつあった。その音は大水の
とどろきのようであり、大地はその栄光で輝い
た。3わたしが見た幻は、このような幻であった。
それは彼が町を滅ぼすために来たとき、わたし
が見た幻と同じであった。その幻は、わたしが
ケバル川の河畔で見た幻と同じであった。わた
しはひれ伏した。4主の栄光は、東の方に向いて
いる門から神殿の中に入った。5霊はわたしを引
き上げ、内庭に導いた。見よ、主の栄光が神殿
を満たしていた。6わたしは神殿の中から語りか
ける声を聞いた。そのとき、かの人がわたしの
傍らに立っていた。

7彼はわたしに言った。「人の子よ、ここはわ
たしの王座のあるべき場所、わたしの足の裏を
置くべき場所である。わたしは、ここで、イス
ラエルの子らの間にとこしえに住む。二度とイ
スラエルの家は、民も王たちも、淫行によって、
あるいは王たちが死ぬとき、その死体によって、
わが聖なる名を汚すことはない。

### 【使徒書日課】使徒言行録　1章12～26節

12使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山か
らエルサレムに戻って来た。この山はエルサレ
ムに近く、安息日にも歩くことが許される距離
の所にある。13彼らは都に入ると、泊まっていた
家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨ
ハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、
バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、
熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。14彼
らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイ
エスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈ってい
た。

15そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って
言った。百二十人ほどの人々が一つになってい
た。16「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手
引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデ
の口を通して預言しています。この聖書の言葉
は、実現しなければならなかったのです。17ユダ
はわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を
割り当てられていました。18ところで、このユダ
は不正を働いて得た報酬で土地を買ったのです
が、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真
ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいまし
た。19このことはエルサレムに住むすべての人
に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケル
ダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるよう
になりました。20詩編にはこう書いてあります。

『その住まいは荒れ果てよ、
そこに住む者はいなくなれ。』

また、

『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』

21~22そこで、主イエスがわたしたちと共に生活
されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときか
ら始まって、わたしたちを離れて天に上げられ
た日まで、いつも一緒にいた者の中からだれか
一人が、わたしたちに加わって、主の復活の証
人になるべきです。」23そこで人々は、バルサバ
と呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティア
の二人を立てて、24次のように祈った。「すべて
の人の心をご存じである主よ、この二人のうち
のどちらをお選びになったかを、お示しくださ
い。25ユダが自分の行くべき所に行くために離
れてしまった、使徒としてのこの任務を継がせ
るためです。」26二人のことでくじを引くと、マ
ティアに当たったので、この人が十一人の使徒
の仲間に加えられることになった。

### 【福音書日課】マタイによる福音書28章16～20節

16さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、
イエスが指示しておかれた山に登った。17そし
て、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う
者もいた。18イエスは、近寄って来て言われた。
「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。
19だから、あなたがたは行って、すべての民をわ
たしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の
名によって洗礼を授け、20あなたがたに命じて
おいたことをすべて守るように教えなさい。わ
たしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共
にいる。」

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

## エゼキエル書　43章1〜7節

1それから、彼は私を東に向いている門に連れて行った。2イスラエルの神の栄光が東の方からやって来た。その音は大水のとどろきのようであり、地はその栄光で輝いた。3私が見た幻は、彼がこの町を滅ぼすために来たときに私が見た幻のようであり、またその幻は、私がケバル川のほとりで見た幻のようであった。私はひれ伏した。4主の栄光は東に向いている門を通って神殿に入った。5霊が私を引き上げ、私を内庭に連れて行った。すると、主の栄光が神殿を満たしていた。

6私は神殿の中から語りかける声を聞いた。すると、あの人が私の傍らに立っていた。7彼は私に言った。「人の子よ、ここは私の玉座の場所、私の足の裏を置く場所である。ここで私は、イスラエルの子らの間にとこしえに住む。イスラエルの家は、彼らもその王たちも、淫行により、王たちの死体により、また、高き所により、わが聖なる名を二度と汚すことはない。

## 使徒言行録　1章12〜26節

12それから、使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。13彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の階に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子のユダであった。14彼らは皆、女たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて、ひたすら祈りをしていた。

15そのころ、百二十人ほどのきょうだいたちが集まっていたが、ペトロはその中に立って言った。16「きょうだいたち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです。17ユダは私たちの仲間の一人であり、同じ務めを割り当てられていました。18ところで、この男は不正を働いて得た報酬で土地を手に入れたのですが、そこに真っ逆様に落ちて、体が真っ二つに裂け、はらわたがみな出てしまいました。19このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。20詩編にはこう書いてあります。

『彼の住まいは荒れ果てよ、
そこに住む者はいなくなりますように。』

また、

『その職は、他人が取り上げるがよい。』

21-22ですから、主イエスが私たちと共に生活されていた間、つまり、ヨハネの洗礼のときから始まって、私たちを離れて天に上げられた日まで、いつも一緒にいた者のうちの誰か一人が、私たちに加わって、主の復活の証人になるべきです。」

23そこで人々は、バルサバと呼ばれ、ユストともいうヨセフと、マティアの二人を立てて、24次のように祈った。「すべての人の心をご存じである主よ、この二人のうちのどちらを選ばれたかをお示しください。25ユダが自分の行くべき所に行くために離れてしまった、この務めと使徒職を継がせるためです。」26二人のことでくじを引くと、マティアに当たったので、この人が十一人の使徒たちに加えられた。

## マタイによる福音書　28章16〜20節

16さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスの指示された山に登った。17そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18イエスは、近寄って来て言われた。「私は天と地の一切の権能を授かっている。19だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

**黙想のためのノート**

**次主日の教会暦と聖書日課**

・5 月 21 日「復活節第 7 主日」の日課主題は「キリストの昇天」。伝統的な教会暦では、「復活日（イースター）」から 40 日目の木曜日を「昇天日」として、イエス・キリストの昇天を記念しており、現在でも多くの国で祝日と定められている。一方、近年の傾向として、伝統的な教会は、平日に定めてきた記念日を前後の主日に記念するようにしてきた。「昇天日」も、「復活節第 7 主日」を「昇天主日」として記念するように定められる傾向にある。教団の主日聖書日課は、このような近年の傾向に沿った日課設定をしている。ただし、今年（C 年）の「復活節第 7 主日聖書日課」は、「昇天後」に焦点を当てた日課設定となっている。

・旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、終末に再建される「新しい神殿」に主が顕現されることを告げる預言の箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、主イエスの昇天後、聖霊降臨を待つ弟子たちの集団が一人欠けた「十二人使徒」を補充したことを伝える箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、復活された主イエスがガリラヤの山で十二弟子に現れられて「大宣教命令」を告げられたことを伝える箇所。

**旧約日課（エゼキエル 43 章より）**

・「エゼキエル書」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）「後の預言者」の第三に置かれる「預言書」で、第一次バビロン捕囚（前 598 年ごろ）でバビロンに移住させられたエルサレム神殿祭司集団の一人、「ブジの子エゼキエル」が、バビロンで祭司任職を受けて以降おこなったとされる預言活動と予言を伝える「預言者の書」としてまとめられている。南王国時代、エルサレム神殿祭司団の中から選ばれて王の側近として仕え、助言を告げる「宮廷預言者」の記録が、「預言者〇〇の預言の書」として宮廷書記官によって作成されていたと考えられる（「歴代誌」や「エレミヤ書」などを参照）。「預言者エゼキエル」は、バビロン捕囚下で活動した預言者であり、エルサレムに王宮があった時代と同じように書記官によって記録がなされることは困難であったかもしれないが、エゼキエル本人か協力者の手によって、本預言書が作成されたと考えられる。

・本預言書には、「捕囚」から数えて「〇〇年」という記述がある。1:1「第三十年の四月五日」、1:2「ヨヤキン王が捕囚となって第五年、その月の五日」、8:1「第六年の六月五日」20:1「第七年の五月・・・その月の十日」、24:1「第九年の十月十日」、26:1「第十一年、その月の第一日」、29:1「第十年の十月十二日」、29:17「第二十七年の一月一日」、30:20「第十一年の一月七日」、31:1「第十一年の三月一日」、32:1「第十二年の十二月一日」、32:17「第十二年のその月の十五日」、33:21「第十二年十月五日」、40:1「二十五年…その年の初めの月の十日」。これらの日付は概ね年代順に現れるが、一部で年代順が崩れており、特に 1:1 と 29:17 は大きく外れている。これらの日付は、歴史上の出来事と結びつけて記述されている例もあるように、具体的な何らかの出来事との関係で預言が語られ、あるいは記されたことを示している。日課個所は、最後に出てくる「我々が捕囚になってから二十五年、都が破壊されてから十四年目、その年の初めの月の十日」（40:1）という日付と共に記されたまとまりの中に収められた預言である。この年は、前 573 年ごろと推認される。この頃にバビロニア帝国下で重要な政治的出来事があったとは知られていない。

・上述の日付の提示から始まる 40 章以下は、「新しい神殿の幻」として知られる。預言者は、幻として終末的な神殿を示されたとして、その具体的な姿を詳細に記している。その「新しい神殿」に「主」が訪れ、現臨される様子を描くのが、日課個所である。その描写は、新約「ヨハネの黙示録」に大きな影響を及ぼしていることが明らかである。これらの幻の描写は、いわゆる「黙示文学」の様式が旧約に現れる例として取り上げられる。ただし、「エゼキエル書」の意図は、必ずしも「主の到来される終末」を強調することにあるわけではない。本預言書は、44 章以下で、「祭司」の務めを取り上げるように、「神殿祭司」が自分たちの仕える「神殿」に現臨されると考える「主なる神」の代弁者であり、また人と神とをつなぐ仲介者であることを強調し、主張しようとしている。これは、「預言者イザヤ」を祖と自認する祭司＝預言者集団の「神の言葉至上主義」の発想による「民の統治」理論に沿ったものと言える。つまり、「エゼキエル書」は、自分たちのユダ＝イスラエルの民が、将来、再建される「神殿」に仕える祭司＝預言者を中心とする神聖統治によってこそ、その民としての生命を回復する、と考えているのである。

**使徒書日課（使徒言行録 1 章より）**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として編集された「初代教会正史物語」であり、初期教会共同体が、拡張展開する中で対立・分裂の危機を経験しながら、最終的に一致を目指した営みへと集約していったことを、前半は使徒ペトロらを中心に、後半は宣教者パウロを中心に、物語る文書である。「ルカ福音書」の末尾で、復活された主イエスが天に昇られた出来事が短く記されているが、「使徒言行録」は、その出来事を拡大して物語るところから始まっている。

・日課個所は、主イエスが天に昇られる様子を見届けた使徒たちが、120 人ほどの仲間と共にエルサレムにとどまり、約束の聖霊降臨に備えていた時期の出来事として描かれている。この期間は、記述通りに考えれば、十日のことにすぎないが、主イエスの昇天と聖霊降臨の狭間という意味で、弟子たちの共同体にとってはアイデンティティの危機を迎えていたときと位置づけられる。本書は、その危機を乗り越え、聖霊降臨に至らせることになった要因として、共同体における「使徒」職の確立を考えている。そして、聖霊降臨後の教会共同体の基礎も、ここに見ているのである。

・ここに伝えられる「イスカリオテのユダに関する伝承」は、「マタイ福音書」の伝える伝承（マタイ 27:3~10）と必ずしも一致しない。「マタイ」は、ユダが自分のしたことを後悔して自殺したと伝えるが、「使徒言行録」は、ユダの後悔を語らず、ある種の因果応報によって彼が事故死したように描いている。「使徒言行録」は、日課個所で「使徒」職の任務を一つのこととして特別強調しており、それゆえに「使徒」を代替可能な職位とも考えているため、その任務からユダが自ら外れてしまったことに対して厳しい評価をしているのだろう。このようなユダに対する評価は、「ルカ文書」に独特のものであり、他の福音書（マタイ、マルコ、ヨハネ）は、主イエスを引き渡したことにこそユダの任務があったが、彼はそれに耐えられなかったという評価に立っている。

・ユダに代わる「使徒」の候補として挙げられた「バルサバと呼ばれユストともいうヨセフ」と「マティア」は、どちらも詳細が知られない弟子。「マティア」は「マタティア」の短縮形で、その名は、前 2 世紀のマカベア戦争を率いて対シリア独立戦争を主導し、ハスモン王朝の祖となった民族的英雄、祭司マタティアの名として知られる。このマタティアの後継者は、息子の一人で「ユダ・マカバイオス」の名で知られる。「使徒言行録」は、この故事を知る人々に向けて、その順序を逆転させた「ユダからマタティアへ」という継承を語ることによって、世俗の王権とは対極にある「使徒」職の意味を印象付けようとしているのかもしれない。

**福音書日課（マタイ 28 章より）**

・日課個所は、「マタイ福音書」の末尾で、一般に「大宣教命令」と呼ばれる箇所。「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」という洗礼定型句があることから、一部は洗礼定式が確立していった時代の加筆とみなす者もある。

・「マルコ福音書」と「マタイ福音書」は、弟子たちが体験した主イエスの復活顕現をガリラヤでのことと設定して伝えているが、「ルカ福音書」はもっぱらエルサレムでのこととして伝えている。「ヨハネ福音書」は、20 章でエルサレムでの出来事として記しながら、21 章にガリラヤにおける復活顕現を追記しており、両伝承を整合させようとしているとみることができる。

・「イエスが指示しておかれた山」がどこを指すのかは明示されていないが、「マタイ福音書」は、「山」を象徴的に重要な「主イエスの臨在の場」としている（4:8、5:1、5:14、14:23、15:29、17:1、18:12、24:3、26:30 など）。「マタイ」は、「山上の説教」（5~7 章）に見られるように、主イエスを「律法」の正統な解釈者と考えており、それゆえに、シナイ山で「律法」を授与されたモーセ（出エジプト 19 章以下）と重ね合わせて描こうとしている。「モーセ物語」では、モーセが神の召命を受けた場所としても「神の山ホレブ（≒シナイ山）」（出エジプト 3:1）を設定しているが、シナイ山を去った後の場面では荒れ野に建てられた「幕屋」が神と会見する場として設定されている。その意味では、「マタイ」は、主イエスを「モーセ」の正統な後継者として描くに際して、「モーセ」と共に、その後継者「ヨシュア」の物語（ヨシュア記）を下敷きにしていると考えられる。ヨシュアは、民をカナン地方に導きいれると、「エバル山」と「ゲリジム山」で「律法」を朗読させ（ヨシュア 8:30 以下）、同じ両山を仰ぐ場所（シケム）で民に契約の更新をさせている（ヨシュア 24 章）。「イエス」の名は、ヘブライ語「ヨシュア」のギリシア語化した表記である。

**来週の誕生日 （5 月 21 日～28 日）**

**主日礼拝の讃美歌から**

・21-337 **番「たたえよ、この日」**は、18 世紀メソジスト派の始祖の一人 C.ウェスレーの作詞。原歌詞は 10 節まであるが、英語讃美歌集では適宜組み合わされた節によって編纂されてきた。曲は、盲目のアマチュア音楽家 R.ウィリアムズの作曲とされるが、19 世紀の讃美歌集で作者不詳のまま「ウェールズの讃美歌曲」として組み合わされて以来、用いられてきた。

・21-171 **番「かみさまのあいは」**（＝こ 40 番）は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌（148 編）で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讃美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。

・21-579 **番「主を仰ぎ見れば」**は、1931 年版『讃美歌』編纂に先立って行われた讃美歌公募に際して、旧日本基督教会牧師・宮川勇が応募した作品の一つで、大分・佐伯教会を牧していたときに黙示録 21~22 章に着想を得てまとめた詩が原案とされる。曲も、同じ公募に応募した中学校音楽教師・土屋初枝の作曲した作品。

*21-337「たたえよ、この日」*

## *Hail The Day That Sees Him Rise*

1. Hail the day that sees him rise, Alleluia! / to his throne beyond the skies. Alleluia! / Christ, the Lamb for sinners given, Alleluia! / enters now the highest heaven. Alleluia!
2. There for him high triumph waits; Alleluia! / lift your heads, eternal gates. Alleluia! / He has conquered death and sin; Alleluia! / take the King of glory in. Alleluia!
3. Highest heaven its Lord receives; Alleluia! / yet he loves the earth he leaves. Alleluia! / Though returning to his throne, Alleluia! / still he calls us all his own. Alleluia!
4. Still for us he intercedes; Alleluia! / his atoning death he pleads, Alleluia! / near himself prepares our place, Alleluia! / he the firstfruits of our race. Alleluia!
5. There we shall with you remain, Alleluia! / partners of your endless reign, Alleluia! / see you with unclouded view, Alleluia! / find our heaven of heavens in you. Alleluia!